令和 元年度　禅ブランディング事業　自己点検・評価結果を踏まえた
外部評価委員による検証・評価シート

禅ブランディング事業　外部評価委員

氏　名　西　田　正　法　㊞

(1) 事業全体に対する評価
当該事業の適切性・妥当性について
禅〈ZEN〉は、行き過ぎた物質文明の中で喘ぐ人々の心を救うべく、今や世界的な広がりを得ている。しかし、民族や文化を超えて広汎に及ぶほど、布教と受容過程で変容することは免れない。「仏祖正伝」を標榜する曹洞宗門であっても、最も基本である坐禅観やその指導は様々に混在している。況んや海外をやであろう。 斯かる状況下、広く深い禅研究において屈指の存在である駒澤大学が、全学体制で『禅と心』をテーマとして学際的国際的な禅の拠点づくりを目指すことは、正しい禅の方向性を客観的に示すことが出来る世界に期待される事業であり、駒澤大学の禅ブランド化を図る最も正当な方向であり、適切性・妥当性に優れている。
当該事業による目的の実現可能性について
駒澤大学の禅ブランディング事業は、駒澤大学が永年積み重ねてきた禅研究の実績と、それを裏付ける膨大な資料を有することを基礎として、学長を中心として全学体制で実施を進めるものであり、各事業チーム独自のテーマに沿った研究成果の獲得と発表、各チーム間を繋いでの連携協力によるイベントやフォーラムの開催、発信事業チームにより適宜 Web サイトやインスタグラムを活用して的確で平易な情報発信、そしてこれらの事業が円滑に進むよう下支えする事業部門の努力があり、目的を実現することは可能であると思う。

(2) 受容と展開チームの事業評価
当該事業の適切性・妥当性について
論語に「温故知新」の言葉もあるが、本チームの事業は我が国の過去における禅の受容と、そこから派生した文化等を研究することで、今後、更に広がって行くであろう禅を、「仏祖正伝」の「正伝」に偏執狂的に固執し、原理主義的な禅に陥れることなく、「正伝」を正しく維持しつつ、大らかで慈悲に富む実践行としての禅を普及することに繋がると思う。その意味で、時宜を得た適正且つ妥当な事業である。
当該事業による目的の実現可能性について
提出された 2019 年度の、事業計画、活動報告、自己点検・評価を拝見すると、計画に沿って着実に歩を進めていることが分かる。研究成果のデータベース化と一般公開や講演会イベントの開催等、目的達成への確かなプロセスを感じる。 惜しむらくは、新型ウイルス感染拡大に因る自粛要請での活動延期である。

(3) 源流チームの事業評価
当該事業の適切性・妥当性について
本チームの事業は、今般の禅ブランディング事業の基幹であると思う。事業目標に沿って進められた『禅の歴史―曹洞宗の源流を尋ねて』の出版に寄せる期待は大きい。また、学術研究に止まらず、仏教学部や他チームとの連携によって実施された食事作法や臘八坐禅等の坐禅会、シンポジウムの開催、Webサイトでの情報発信は、研究機関であり教育機関でもある大学として大いに評価出来る適切・妥当な事業である。
当該事業による目的の実現可能性について
事業目標に沿って仏教学部とも密接に連携を取り事業を推進し、研究成果を『禅の歴史―曹洞宗の源流を尋ねて』に纏め上梓するに至ったことを中心に、目標に沿って着実に歩みを進め、目的の実現を図りながら最終年度を迎えていることが活動報告から読み取れる。ゴールは見えて来たと思う。 但し、個人的に残念な事は〈2019年度事業計画〉bにあった「全国の曹洞宗僧侶教育施設・僧堂で行われている坐禅作法の調査」が断念されたことである。薄々予想はしていたが、恐らく調査対象の壁が厚かったのだろうと推察する。「仏祖正伝」として公の道場であっても室内で伝法された作法があり、それに固執することから、第三者の介入が許されないのである。そこで、歴史的にインド、中国の坐禅作法に遡りつつ、それを踏まえた道元禅師の坐禅作法、更に瑩山禅師やその後の禅匠が説かれた坐禅作法等を比較対象し、特に坐禅を指導する立場にある人達が、客観的且つ冷静に坐禅作法を概観し、自身が大切にしている作法に正統性があるのか、正統性がなくどこかの時点で突発的に伝え出されたものなのかを知ることの出来る、坐禅作法を文献から集約した資料として刊行して頂きたい。

(4) 人の体と心チームの事業評価
当該事業の適切性・妥当性について
禅の心理学的側面からの研究は、駒澤大学が国内では先駆者である。そのことから、従来の研究方法に最新の機器を使用しての研究に至ったと想像するが、ファンクショナルＭＲＩによる脳機能解析の中止は残念であった。しかし、チーム名が「人の体と心」であることを考慮すると、坐禅中の脳波や脳機能解析ばかりを研究対象とするのではなく、道元禅師が２４時間の一挙手一投足を清規に禅として説かれていることに着目し、もっと広く体と心の関係を捉え研究対象としては如何か。身心一如は観念ではなく人間の実相である。『普勧坐禅儀』や『辨道法』『坐禅儀』等に示された、坐禅に入る前の具体的身体作法等も研究に加えて頂けたら、坐禅を普及する大切な指針となり、更に適切性・妥当性ある事業となるのではないか。
当該事業による目的の実現可能性について
使用装置、解析装置の動作不良に因る実験の中止、事業成果等の報告として企画していた禅心理学に関する講演会の断念と、本チームは不運が続き乍らも不屈の精神で事業を継続されている事と拝察する。〈今後の計画〉に「２０２０年度は禅（ZEN）プログラムの検討と構築を目指し、開発したセミナー等のプログラムを実践し、駒澤大学のみならず、広く社会に普及するよう努める。そして、本学学生教育の一環として、禅(ZEN)プログラムを提案し、駒澤大学生のアイデンティティーの形成につなげる」と、ありました。得てして宗教家は自己の体験を優先し、感覚的な指導に偏る傾向があるが、本チームの研究から禅を科学的データに基づいた理性

的プログラムが構築され、その成果が駒澤大学生に反映され、学生のアイデンティティー形成につながるなら、これに勝るブランディングはないと思う。是非、実現させて欲しい。このプログラムが有効であるならば、学生や社会人の様々な研修会への応用も可能であろう。目的実現に向けてのラストスパートに期待します。

(5) 現代社会チームの事業評価
当該事業の適切性・妥当性について
本チームの事業は、禅の中に在る人ではなく、禅の周辺に在る人々を対象として、チームを構成する研究者もまた、禅学の専門家ではなく駒澤大学教員として禅の周辺に在り、本事業を契機に、根源に禅〈ZEN〉的なものを秘めた社会制度や文化等様々な社会現象を研究対象とした実に興味深い事業であり、その研究成果の発表は、これまで禅〈ZEN〉に興味を示して来なかった幅広い層の興味を引き禅の入り口に誘うと予想される。価値観が多様化し、自らの価値観を定め得ずにいる人々への禅のアプローチとして、周辺に在って歴史と現代社会を俯瞰出来る立場だからこそ可能な貴重な事業で、特に若年者に対して適切性・妥当性を有すると思う。
当該事業による目的の実現可能性について
視察 PJ、学際研究 PJ を通してのフォーラム PJ、出版 PJ を計画推進されてきたが、文科省のブランディング事業中止と予算の見直し、更には新型ウイルス感染拡大に因る活動の自粛に迫られ、多くの計画が中止となったことは残念である。コロナ禍の終息が見えない今、本チームの事業は研究成果を出版に集約することで、実現可能な目的とすることが出来るであろう。

(6) 発信事業チームの評価
当該事業の適切性・妥当性について
現代社会に於いて積極的に情報を発信することは、事業を事業たらしめる上で重要である。当然、各事業チームもそれぞれに Web サイトを駆使したり研究成果を刊行したり事業の成果の発信に努めている。本チームが、禅ブランディング事業全体を総括して的確に発信することは、駒澤大学の禅ブランディング化にとって適切且つ至極妥当なことである。世界や無関心層へのアプローチを視野に入れている本ブランディング事業にとって、駒澤大学の存在とその価値を知らしめる重要な役割を担っていると言える。
当該事業による目的の実現可能性について
インスタグラムの活用等を通して、不特定多数の広汎な大衆に情報を発信するには平易でありながら興味深い大衆化した情報にしなければならないが、大衆化には必ず誤解や曲解が伴うものである。本チームの事業が、間違いなく目的を実現するには、他チームとの連携に依る内容の点検確認が不可欠であり、誤った情報や印象に変容されないよう、細心の注意を払う事が目的実現の鍵ではなかろうか。

(7) 事務部門の事業評価
当該事業の適切性・妥当性について
事務部門は当に「縁の下の力持ち」的存在である。専門分野の研究参究に邁進する学者研究者からなる４研究チームに発信事業チームを加えて５チームから成る禅ブランディング事業をサポートするため事務部門が掲げた〈事業内容・目標〉の①～⑤は、本事業を下支えし成功に導くために適切であり妥当である。
当該事業による目的の実現可能性について
事務部門の難儀さは、サポートは基本的に受け身であり、柔軟且つ臨機応変な対応が求められる。苦労多く、日の目を見ない縁の下の力持ちに徹することは、禅の根幹となる無我行の実践に他ならない。駒澤大学が禅ブランドとして認知されるには、実に禅の根幹である無我行が事務部門に於いて実践されるかどうかに懸かっていると思う。事務部門における目的の実現は、愚の如く魯の如く、人知れず勤め支え続けることが出来るかどうかであろう。

その他、要望や改善が望まれる事項について
駒澤大学禅ブランディング事業にとって、昨年と今年立て続いて大きな障害があった。一つは、昨年、文科省から通達された予算削減であり、もう一つは、言うに及ばない感染症の拡大から発出された緊急事態宣言による社会活動の自粛である。 イベントやフォーラムを企画していた事業チームにとっては痛恨の痛手であったことでしょう。ご心中お察し申し上げます。 しかしながら、本事業は最終年度を迎えております。仏教が説く生き方は、巡り来る諸縁に即応し最善を尽くすことです。各事業チームと事務部門の皆様が、最期まで最善を尽くし、事業を全うされますことを祈念申しあげます。 正法九拝

令和 元年度　禅ブランディング事業　自己点検・評価結果を踏まえた
外部評価委員による検証・評価シート

禅ブランディング事業　外部評価委員

氏名　　趙　佑鎮　　㊞

(1) 事業全体に対する評価
当該事業の適切性・妥当性について
禅（ZEN）の思想的研究を基礎とした現代人が抱える「心」の問題に対する新たな提言。 禅（ZEN）の研究を、超領域的に行うことを通した、新たな視座の獲得。 禅（ZEN）思想の根幹である「坐禅」が身心に与える影響の科学的検証。 上記を総合的に結んだ研究の成果を、混迷の一途をたどる国内外に向けて発信する取組は、『禅と心』研究の学際的国際的拠点づくりとブランド化事業に向け、駒澤大学における既存研究の蓄積をさらに深化させ、また新たな視点を取り入れ進化していくことにより、駒澤大学をより一層発展させるための駒澤ブランドを明確にする事業足り得るものであり、その適切性・妥当性について高く評価する。 各々のチームの自己評価と活動報告のなかでも、他学部・部署との連携が強調されている点で、ブランディング事業としての意義は高いものと評価する。
当該事業による目的の実現可能性について
禅ブランディング事業　5ヵ年計画の4年目であるが、補助金受給期間が2019（令和元）年度までに変更となり、予算措置および実行計画の見直しの必要に迫られたところに、新型コロナウイルス感染拡大の影響を受けたプロジェクトもあったが、各プロジェクトが着実に成果を積み上げ、最終年度となる2020年度に一つの区切りとして成果を収斂させ、その後につながる事業展開となっている。

(2) 受容と展開チームの事業評価
当該事業の適切性・妥当性について
禅の日本社会への受容に関する研究については、禅が日本社会に及ぼした影響を踏まえ、影響の拡大をはかるべき道を模索する研究は、非常に意義があり適切かつ妥当である。 昨年の外部評価で望まれる取り組みとして提起された、一般大衆に向けたコンテンツ作成も、一般・学生を対象とした講談や禅寺の食事作法体験会開催を行ったという点で好ましかったと評価する。例えば、僧の人間的魅力やストーリが一般大衆にも伝わる「道元絵伝の絵解きと説話」等のイベントは興味深く、工夫がされていると思われる。
当該事業による目的の実現可能性について
駒澤大学のブランドを高める研究アーカイブとなる、「禅籍目録電子版」や「禅籍抄物、敦煌禅宗文献目録」のデータ作成および公開に向けての活動が着実に進行しており、これまでのチームメンバーが積み上げてきた理論的研究ベースを鑑みるなら、目的の実現可能性が高いと評価する。

(3) 源流チームの事業評価
当該事業の適切性・妥当性について
禅ブランディング事業において、曹洞禅の源流の研究は、本事業の基幹となるべき研究であり、土台となるものである。新しい視点を積み上げる際に歴史を知ることの重要性は言うまでもなく、非常に適切かつ妥当である。これらの中心的担当を仏教学部が行い、曹洞禅の視点による助言や他学部や部署との連携をはかっていることは大いに好ましい。
当該事業による目的の実現可能性について
近代における『禅と心』研究シンポジウム、「坐禅と禅院の食事作法」、「臘八坐禅」を開催し、参加者の期待に応えることができた。 Webサイトなどを利用し、禅の歴史や思想を発信するなど、十分な成果が期待できる。大学アイデンティティの大本ともいえる、源流チームの諸々の研究含意が、順次学内に浸透していると期待している。

(4) 人の体と心チームの事業評価
当該事業の適切性・妥当性について
展開チームと源流チームの事業が過去と現在のつながりを重視するものとするなら、当該チームの事業は現在と未来をつなぐ挑戦的な試みといえるであろう。 「禅」の世界的な注目から、現代社会に潜む「心の問題」に焦点を当て、またそれを印象論ではなく、実際の坐禅体験や脳波測定や、MRIを活用した科学的な解明に踏み込む研究として、非常に適切であり妥当である。
当該事業による目的の実現可能性について
ファンクショナルMRI法による脳機能解析研究は、使用装置、解析装置の動作不良により予定した実験が実施できないなど進捗に若干の不安も残るプロジェクトではあるが、禅の心理学的側面からの研究において、「いす坐禅による注意持続と呼吸生理の変動」の実験を開始し、いす坐禅によって主観的感情・気分に変動がみられるのかを検討する研究計画が立案され、さらに2020年度に向けての新たな研究が進行するなど、禅の心理学的側面研究としての成果が期待できる。 当該チームの事業は、先行研究の整理と実地調査の段階であり、長いスパンでその成果を期待したい。

(5) 現代社会チームの事業評価
当該事業の適切性・妥当性について
社会チームの事業は、禅に関しては精通していない仏教学部以外の教員が、駒澤大学の大本を意識するきっかけをつくった点で、ブランドアイデンティティ形成に大変肯定的であったと思われる。禅（ZEN）と社会制度の研究は、今日的な禅の世界的な流行、およびその応用として企業や医療、健康などの分野に広く広まっていることについて、各々の専門分野の関心から紐解くことは、現代人が抱える心や社会制度の問題への提言として、非常に適切であり妥当である。
当該事業による目的の実現可能性について
ブランディング事業中止による予算見直しとコロナ禍による事業中止により、実施不可能な事業が多くあり、難しいプロジェクトであったが、その中でも永平寺の視察により知見を得、「禅と現代社会研究」の事業を通して蓄積してきた研究成果、学生やビジネスパーソンに役立つ禅文化本の出版に向けた作品化が進行しており、期待できる。

昨年の当該チームからの自己評価のなかで、学生のイベントへの参加状況が低いとシビアな課題指摘がされていたが、今後とも最大の課題となるだけに、ポストコロナを見据えた、さらなる工夫が期待されるところである。

(6) 発信事業チームの評価

当該事業の適切性・妥当性について

禅の情報発信というまさにブランディングを Web サイトや様々な企画により、的確に鋭く発信をすることは、駒澤大学のブランドアイデンティティ確立に向けた事業として非常に重要であり、適切かつ妥当である。

当該事業による目的の実現可能性について

① 禅ブランディング Web サイトによる継続発信

② 禅ブランディング 「駒澤大学×ZEN 対談」企画

〈第四弾〉永井政之×大森立嗣氏×各務洋子

〈第五弾〉飯塚大展×デービッド・アトキンソン氏×青木茂樹

など、Web サイトを中心に発信がなされ、4 研究チーム主催シンポジウムや、イベント等をサポートし、発信した。

今後、本学のステークホルダーや社会に発信し続け、各チームの 5 年間の成果を研究報告としてまとめ、学内外、社会一般に公開することにより当該事業の目的の実現可能性は充分である。ステークホルダーとしての受験生に向けた情報発信はその訴求内容に工夫が求められるだけに興味深いところである。

(7) 事務部門の事業評価

当該事業の適切性・妥当性について

本事業を円滑に遂行し、成果をあげるべく、連絡会・プレス対応や各種サポートについて関係各所と連携し、適切かつ確実に運営する体制が整備されている。

当該事業による目的の実現可能性について

昨年同様に、連絡会の運営サポート、各種イベントの運営、事務作業が、しっかりした体制で業務遂行されており、目的実現が十分期待できる。

その他、要望や改善が望まれる事項について

私立大学研究ブランディング事業支援期間が 2019 年度までとなったことによる予算の見直し、また新型コロナウイルスの影響を受けたプロジェクトもある。

2020 年度の事業総括に向けて、各プロジェクトが知恵を出し成果につなげる努力を継続するとともに、外部広報のみならず学内への当事業の広報により全学的な取り組みとして成果をあげることを期待する。

昨年の外部評価でも要望したものであるが、この事業によるブランドアイデンティティが学生の意識にどのように変化をもたらしたかをより明確にすることを求めるものである。また、本ブランディング事業の象徴としての「禅センター」の創立に向けた動きが加速化されることを期待するものである。